

Axel Bayer, Spaltung der Christenheit: Das sogenannte Morgenländische Schisma von 1054.**(Beihefte zum Archiv für Kulturgeschichte, 53.) Köln, 2002.****岸田 菜摘**

本書は2002年にドイツで出版された、A. Bayerによる著書である。副題には1054年のシスマとあるが、実際には10世紀から12世紀までのビザンツ＝ローマ間の政治的関係を主に取り扱っている。1054年の「相互破門」については浩瀚な先行研究が存在し、近年ではT. KolbabaやA. Louthなどによる、教義や慣習の差異の認識やアイデンティティの変化などに注目する研究がなされている¹。しかし、本書のように10世紀から12世紀という比較的長期のスパンで東西教会の関係を当時の政治状況から分析する研究は比較的少なく、紹介する意義のある研究であると考えられる。

Bayerは2000年にケルン大学で博士論文を提出し、本書はその学位請求論文を元にした研究書である。以下が章ごとの内容の要約である。

第一章では、本題となる十一世紀における東西教会の関係性の前提として、基本的なビザンツにおける国家と教会の関係性、東西教会の宗教・文化的な違い、また東西教会の間で問題とされたイリュリウム地域や南イタリア・シチリア地域、そして「フォティオスのシスマ」の後、十世紀前半までのイタリア半島におけるビザンツの影響力などを論じている。

第二章は「オットー朝の皇帝時代の教皇とビザンツ」と題し、オットー一世以降のローマ＝ビザンツ関係を取り扱っている。筆者はまず、オットー朝の皇帝の存在がローマ＝ビザンツ関係に緊張をもたらしたとするA. Michelの議論に対して、オットー一世の出現が直接両者の関係を疎遠にさせた訳ではないとする。Bayerは十世紀後半のビザンツ＝ローマ関係の緊張は皇帝称号に関する認識の差異、及びビザンツ皇帝ニケフォロス二世フォカスによってビザンツが再び影響力を増していた南イタリア教会の裁治権を巡る問題という、政治ないし教会政治的な理由による一時的なものとしている。また「セルギウスのシスマ」と呼ばれる教会の対立もまた、南イタリアの教会政治における不和が背景にあったとする。

第三章では、1024年からいわゆる「相互破門」の事件が起こる1054年までのビザンツ＝ローマ関係を論じている。著者はいわゆる「セルギウスのシスマ」の影響としての東西教会の不和は長続きしなかったとする。またその見解によれば、1024年から1054年まで友好を保っていた東西教会の关系到新たな負荷を加えたのは教皇庁の改革運動と、ノルマン人の南イタリア進出で

1 T. Kolbaba, *The Byzantine Lists: Errors of the Latins*, Chicago, 2000.; A. Louth, *Greek East and Latin West: the church, AD 681-1071*, Church history (Series), 3vol., New York, 2007, pp.305 – 317.

あった。当時のローマ教会の立場について著者は、レオ九世が始めた本来ローマ教会に属する地域の裁治権の復活がビザンツとの衝突をもたらしたとしつつも、ノルマン人に対する軍事行動という面においては東西それぞれの帝国に頼らざるを得ず、ビザンツとも協調政策をとる必要があったと指摘する。

第四章では、1053年から1054年にかけての東西教会の交渉に注目している。

1053年頃にコンスタンティノープル市内のラテン人教会や修道院が総主教の命令で閉鎖されたという事件について、著者は当時の東西教会の関係が良好であることを根拠に事件が実際に起こったことであるとし、これとほぼ同時期にオフリドのレオンからラテン人に対して批判が行われたと指摘する。オフリドのレオンがラテン人の慣習を批判した理由については先行研究で様々な説が唱えられているが、著者はここでそれぞれの説を検討し、批判を加えている。著者はオフリドのレオン及び総主教ケルラリオスがラテン人の慣習を非難した理由を、改革教皇庁の首位権に関する主張や南イタリアへの関心拡大に対する警戒のためとしている。

レオンによる非難に対する教皇側の反応について、著者は当時の教皇レオ九世がノルマン人に対する軍事行動の中で苦境に立たされていたことを指摘する。教皇特使たちによる破門状の作成は、皇帝との協調関係を保ちつつ対立をケルラリオスの周囲にとどめようとするものであったが、実際には両教会の緊張関係を強めてしまった。著者は総主教ケルラリオスをこの対立激化に大きな責任を負っていると指摘する。

第五章では、「相互破門」に対する周囲の反応が取り上げられている。ビザンツの聖職者の大部分は1054年の事件にほとんど触れておらず、1054年の事件が広く言及されるようになったのはミカエル八世の下での教会合同の時代に入ってからであると著者は指摘する。他方、西方教会では1054年の論争についていくつかの記録がなされ、東西教会の間で首位権や種無しパンの議論が行われたことが知られていた。

第六章では、1059年のメルフィの和約に至るまでのビザンツ＝ローマ関係が論じられている。教皇ウィクトル二世、ステファヌス九世はノルマン人の南イタリア進出に対してビザンツとの軍事的な同盟を求めた。転機となったのは1059年のメルフィの和約で、著者はローマ教皇ニコラウス二世がビザンツよりロベール・ギスカルとの同盟を選んだことにより、今まで東西教会の間に存在したトピック、すなわち南イタリア・シチリアの裁治権やフィリオクエ問題などが新しい展開を迎えたと論じている。著者は1060年に執筆されたミカエル・プセロスのケルラリオスに対する称賛について、このような当時の政治的状況が反映されているとする。

第七章では1060年代のビザンツ＝ローマ関係が論じられている。ローマ教会とノルマン政権の同盟はビザンツ＝ローマ関係の悪化を引き起こしたが、ローマ教会内部でのシスマが緊張に水を差す結果となったとされる。著者はアルバのベンツォによる記録から対立教皇であるアレクサンデル二世やホノリウス二世がビザンツとの同盟を試みていたことを論証する。著者は1060年代当時の東西教会世界はそれぞれ断絶の回復を試みながらも、結局は達成されることはなかったと結論づけている。

第八章では教皇グレゴリウス七世とビザンツの交渉が論じられている。ビザンツ皇帝ミカエル七世はアレクサンデル二世およびグレゴリウス七世に対して使節を送るが、その背景にはマンツィケルトでの敗北や南イタリアにおけるビザンツ支配の拠点であった都市バーリがノルマン人の手に陥落するといった軍事的な苦境があったとされる。著者は皇帝ミカエル七世がローマ教会との関係回復を求めたのは政治的な動機によるものと推測する。他方、グレゴリウス七世はビザンツ世界に教皇の首位権を認めさせることを計画していたと推測している。

第九章では、11世紀末のローマ教皇とビザンツの関係が論じられている。著者は教皇ウィクトル三世がビザンツとの友好的な関係構築を模索していたと論じる。また、教皇クレメンス三世とキエフ府主教ヨハネス二世の間でフィリオクエ非難をはじめとする論争が発生したが、著者はその背景には政治的な理由が存在したとする。

第十章では、第一回十字軍をきっかけとした東西教会間の緊張の激化が論じられている。1098年に陥落したアンティオキアの政治的所属についてのビザンツと十字軍諸侯の対立をきっかけに、1054年の出来事を知悉するロベール・ギスカールの息子ボエモン¹の反ビザンツプロパガンダによって、ギリシャ人を異端と非難する言説が十字軍の史料に出現したと著者は主張する。また、1098年に開催されたバーリの教会会議ではギリシャ系聖職者によってフィリオクエ論争が再燃し、さらに1099年のエルサレム陥落を機にエルサレム・アンティオキア総主教などの人事を巡ってギリシャ系教会と十字軍の対立が深まった。

第十一章では、12世紀はじめのビザンツ＝ローマ関係が主題となっている。パスカリス二世はアレクシオス一世を背信者と称したが、著者はその背景には教皇とバルカン半島で対ビザンツ戦争を始めていたアンティオキア公ボエモン²の友好的な関係が存在したとする。1112年にはコンスタンティノープルで論争が行われ、著者は首位権に対するビザンツ側の詳細な反駁の出現に注目している。その後も教会の統一性を復活させるための交渉は続いたが、著者はローマ教会との交渉のビザンツ側の当事者になったのがもっぱら皇帝アレクシオス一世を頂点とする世俗の人間であり、ビザンツ教会がそれに関わらなかったこと自体が東西教会関係の緊張を示していると指摘する。またこのような緊張状態の結果として、オフリドのテオフュラクトスの記述に見られるように、ビザンツ聖職者の間でラテン人の慣習をシスマ的なものと見なす態度が広範に増えたと推測している。

結論部分で著者は、1054年の「相互破門」について、これが東西教会の分裂の始まりとして考えられるようになったのは1204年の第四回十字軍以降のことであると主張する。

本書の特徴は、取り沙汰されることの多い東西教会の教義面での問題ではなく、ビザンツ＝ローマ間の政治関係を中心に据えて東西教会の間の断絶の原因を探ろうと試みたところにある。またその方法として、従来史料として使われるビザンツ側の史料や教皇周辺の史料の他に、西ヨーロッパ側の年代記、あるいは聖人伝などに記録された巡礼や使節として西ヨーロッパからコンスタンティノープルを訪れた聖職者の記述を用い、東西教会の教会人たちの交流や互いへの意識を分析した。

結論として著者は、12世紀に発生した東西教会の断絶は教義や慣習の差異によるものというよりも、むしろ十字軍国家とビザンツの摩擦やアンティオキア公ボエモンとビザンツの戦争という具体的な政治状況によって引き起こされたものであるとする。著者の結論は東西教会関係のあらゆる側面を包括するものというよりも、あくまで主に政治的な交渉の分析から導き出されたものであるが、先行研究の説を一つ一つ検証しつつ、具体的な交渉の記録や政治上の利害関係から当時のビザンツ＝ローマ関係の再構築を試みたことは、意義深い研究上の成果であると考えられる。また多数の先行研究を整理し、東西教会の分裂の原因とされた様々な出来事について検証を試みている部分は、東西教会関係についての研究史を振り返るためにも有用であろうと考えられる。

しかしおそらくは史料上の制約もあり、本書の記述の中心はローマ教会をはじめとして西ヨーロッパ側にあったという印象がある。また、例えば本書では自明のこととされているが、コンスタンティノーブル総主教座の自律性の発展、特に皇帝と総主教の関係について、自律性を得た総主教が皇帝の思惑から離れていくと単純に言い切ってしまうてよいのだろうか。どの段階でどれほどの自律性を手にしていたのか、さらなる検証が必要と考えられる。10世紀から12世紀にかけてのビザンツおよび正教会内部での変化がいかに推移したのかについては、今後の検討課題としたい。